慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ベルクソンにおける身体の社会性
Sub Title	La sociabilité du corps chez Bergson
Author	西山, 晃生(Nishiyama, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2009
Jtitle	エティカ (Ethica). Vol.2, (2009.) ,p.43- 65
JaLC DOI	
Abstract	Selon Bergson, tous les corps vivants, y compris le corps humain, sont déstinés à agir de la manière “appropriée” vers ce qui les entourent, et par cela même, maintenir l' équilibre avec l' environnement. On peut l' appeler la sociabilité élémentaire. Mais, tandis que cette sociabilité marche bien chez des animaux par l' instinct, l' homme, tendu vers l' intelligence, est dérangé par des représentations réflexives qui dépriment la volonté d' agir. Ces représentations déprimantes, dont on peut compter l' inévitabilité de la mort et l' écart entre l' action et l' effet, nous introduisent une image du corps humain fragile et impuissant. Pour rétablir l' équilibre, la vie, la source commune de l' intelligence et de l' instinct, en utilisant l' intelligence même, fait des représentations qui servent de contrepoids. Ça veut dire des représentations qui rassurent la relation actuelle entre le corps et ce qui l' entourent. La forme originale de ces représentations est celle de la “présence efficace” dans le monde, qui se tourne vers le corps humain. Le corps humain, fragile et impuissant lorsqu' il est pris à part par la réflexion, peut trouver sa position et se trouve invité à agir dans le monde en étant représenté avec cette “présence efficace”. La sociabilité du corps chez l' homme est donc la sociabilité de la représentation du corps.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20090000-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ベルクソンにおける身体の社会性

西 山 晃 生

はじめに

本稿の目的は、ベルクソンの身体論を彼の社会論のうちに位置づけることである[1]。具体的には、『物質と記憶』やその他の著作で示された身体のあり方が、『道徳と宗教の二源泉』の最初の二章で提示される人間の自然的傾向、つまり社会を形成し、維持していこうとする傾向とどのように関わるかを論じることである。そのためにはいくつかの段階を経る必要がある。

第一に、原初的な社会性とでもいったものを確立しておかなければならない。ベルクソンにおいて、生物の身体とは自らと周囲にあるものとを区別しつつ、両者の間に関係を保っていこうとする傾向を持つものである。この傾向を仮に社会性と呼ぶならば、あらゆる生物は社会性を持つことになるはずだ。われわれの第一の仮説は、ベルクソンの社会論が生物の身体そのものの傾向に立脚しているということである。

第二に、この原初的な社会性を前提としたうえで、他の動物には見られない、人間に固有の社会性を探らなければならない。このことを問う上で重要になるのが、宗教と宗教的表象である。

ベルクソンによれば、自然は人間を社会的なものに作り上げた[2]。そして、社会の結束を維持するため宗教を形成する傾向をも与えた。この、自然に源泉を持つ宗教を彼は「静的宗教」と呼ぶ。「静的宗教」は表象を共有することによって個人の行動を方向づけ、社会が解体するのを防ぐ

だろう。したがって、この宗教にとって何よりも大切なのは教義の内容ではなく、人を行動へ導くような表象を作り上げることである。

あらゆる社会に宗教が見られるという事実は、あらゆる社会が宗教による結束の強化を必要としていることを意味する。つまり、社会は絶えず危機にさらされており、宗教という対応策によって「不安定な平衡状態」（DS241）を保っている、とベルクソンは見る。したがって、そこには平衡を乱す要因と平衡を回復する要因があるはずだ。われわれの第二の仮説は、この二つの要因のいずれもが身体と深く関係しているというものである。

したがって、第三に宗教と身体との関係を問わなければならない。宗教の目的が行動を導くことであるなら、それは身体と無関係でいられないだろう。つまり、人間に固有の社会性も身体のあり方に関わっているという見通しが立つ。だが、どのような仕方においてであろうか。また、原初的な社会性と人間に固有な社会性との間で身体のあり方はどう異なっているのか。何が失われ、何が得られたのか。宗教的表象が身体とどのように関わっているのかを示すことができれば、こうした問題を解明することができるだろう。

われわれは第 1 節でベルクソンの身体論について論じ、生物の身体そのものの傾向に言及する。第 2 節では人間の社会性が生命そのものの要請に基づいているというベルクソンの説を確認する。その上で第 3 節では、人間に固有の社会性と身体との関係を、ベルクソンが例に挙げる宗教的表象の分析を通じて明らかにする。

第 1 節　身体の役割

『意識の直接与件に関する試論』において、ベルクソンは個人の意識を持続という形で描き出した。『物質と記憶』および『精神とエネルギー』（に収められたいくつかの論文と講演）は、この意識を自然のうちに、あ

るいは外界との関係のうちに置き直すことによって、われわれの具体的な生のあり方を記述しようとした仕事にほかならない。ベルクソンが身体を問題とするのはまさにこの文脈においてである。

われわれは身体を通じて外界と、したがって物質と関わっている。ベルクソンの議論は、この事実の分析によって方向付けられるだろう。身体は一方において物体でありつつ、他方において意識を伴った「私の身体」である。見られ、聞かれ、触れられ、動かされる諸物体のなかでただ一つ、自らのものであると意識されもするという、身体のこの特権は何に由来しているのだろうか。

ベルクソンの基本的な方針は明快だ。「私の身体」そのものから出発することはしない。最初にそのような身体を措定した場合、身体が常に他の諸物体に囲まれ、そのただなかで活動しているという事態を取り逃してしまうからだ。したがって、反対に物質の全体から出発し、そこから身体が際立ってくる仕方を説明するのでなければならない（cf. MM65）。

以上のことを踏まえたうえで、ベルクソンが身体をどのようなものととらえていたか見ておこう。

1-1　物質から際立つものとしての身体

ここでは『物質と記憶』の問題を引き継いだ「心と身体」（『精神のエネルギー』所収）の端的な記述を手がかりにする。

> 「われわれの身体は、物質世界に挿入されており inséré、刺激を受け取って、それに対して適切な仕方で応じなければならない」（ES43）。

この一文には三つの事柄が含意されている。第一に物質世界への身体の挿入、第二に刺激に対する応答、第三に適切さへの要請、すなわち「〜ばならない」という規範性である。

最初の点について。挿入という語は身体の資格を示す。身体を「帝国の中の帝国」（MM43）と考えてはならない。すなわち、物質のなかで周囲から絶対的に独立し、表象の形成や保存といった固有の機能を果たすものと考えてはならない。われわれの身体は、物質世界のただなかに、他の諸物体と同じように置かれている。

第二の点について。ベルクソンによれば、物質とは絶えざる相互作用である。そこではあらゆるものがあらゆるものに働きかけている（MM11）。物質のただなかに他の諸物体と同じように置かれているということは、他の諸物体と同じように作用を受け、それに対して作用を返しているということである。

身体が他の物体と区別されるのは、受け取ったものを返す仕方をある程度「選択しているように見える」（MM14）という点においてであり、またこの点においてでしかない。物体が自然法則に従って規則的に、あるいは予見可能な仕方でふるまうとすれば、生物の身体は不確定性を持ち込む。それは物質のただなかに立ち現れる「不確定性の中心」（MM33）である。

この不確定性は何に由来しているのか。それは、身体の複合的な性格である。他の物体において作用と反作用がひとつながりであり、事実上区別されないのに対して[3]、身体は両者を区別しつつ組み合わせたものである。つまり、身体は受容と応答の系、ベルクソンの言葉でいえば「感覚運動系 système sensori-moteur」（MM249）として規定される。もちろん、受容と応答がおよぶ範囲、つまり行動の範囲は種によって異なるだろう。しかし、本質は変わらない。接触による直接的な刺激と即時的な反応とが「収縮性」（MM55）において混じりあうアメーバから、離れた対象を知覚し、熟慮の末に行動をなすことのできる人間まで、あらゆる生物の身体は周囲から受け取ったものを周囲へ返すものとして規定される。

作用と反作用、刺激と反応、感覚と運動が区別されつつ排他的な系をなす[4]、つまり一体となっている以上、身体は周囲から独立したものであ

る。ただし、この独立は相対的なものであるに過ぎない。先に見たように、固定された輪郭を持つ身体がまずあって、それが周囲と関わるのではないからである。身体が独立しているということは、その作動において他の物体から際立ってくるという意味にほかならない。つまり、感覚を受けつつあり、行動をしつつある（あるいは準備しつつある）ものこそが身体である。

身体の身体たるゆえんが出来上がった機構にあるのではなく、その機構が作動しているということにあるのだとすれば、そして作動が選択という仕方でなされているのだとすれば、身体には常に意識が伴っていることになる。意識とは身体と別の何ものかではなく、身体が感覚運動系として働いているという事実そのものである。ベルクソンにとって、身体と意識との結びつきは解かれるべき問題ではない。というのも、両者が別々に規定されるのではなく、意識を伴っているものを身体と呼ぶからである。

1-2　環境と適切な関係を築くものとしての身体

しかし、身体が物質全体のうちから際立ってくるものだとしたら、意識も同じように物質から生じるのだろうか。そうではない。以下に示すのは、適切さという基準が身体のみによっては決して要請されることも満たされることもなく、したがって意識の選択は身体と別のものによって支えられているという事態である。

ここで第三の点が重要になる。感覚運動系としての身体が独立した（独立しつつある）ものであるならば、そのふるまいは物体のように予見可能でもなければ、また不規則なものでもないはずだ。周囲から受け取ったものを返す仕方は選択されるのであり、その「選択は行き当たりばったりになされてはならない」（MM67）。つまり、適切な仕方でなされなければならない。適切な反応とは、記憶力の監視を受け、記憶力に導

かれつつなされる行為である。

「この選択は、間違いなく過去の諸経験に着想を得ており、反応は類似する諸状況が残すことのできた記憶 souvenir に呼びかけることなしにはなされない」（MM67）。

しかし、具体的にはどのような行動が適切なのだろうか。身体が自らの周囲を取り囲まれたものとしてしかありえず、周囲へ働きかけるものとして規定される以上、適切な行動の適切さは、周囲との関係に関わるだろう。

「こうして適切な反応、環境との平衡、要するに、生命一般の目的である適応が生じる」（MM89）。

ここまでの議論をまとめておこう。身体は、物質のただなかから感覚運動系として際立ちつつ、周囲との間に平衡、つまり適切な関係を築くよう差し向けられたものである。つまり、一方において身体は自らと自らならざるものとを区別しつつ、他方において自らならざるものとの結びつきを確立する。身体のこうしたあり方を支えているのは受容と応答という別々の働きが不可分に結びついているという事態であり、記憶力による監視と支えである。これらすべての性質は身体に外から付け加わったものではなく、身体を他の諸物体から分かつ本質的な要素にほかならない。

したがって、ベルクソンの身体論を受け入れるならば、われわれは次のように言いうる。生物の身体はただ生物の身体としてあるというそのこと自体によって社会的である。というのも、生物の身体は、周囲との適切な関係を築くことへとそもそも差し向けられているからである。

1-3　現実を規定するものとしての身体

身体のこの社会性が成り立つのは、身体がわれわれを現実へと繋ぎ止めているからにほかならない。

「…われわれの感覚運動的、あるいはむしろ触覚的経験は、われわれの現前を物質のこの有機化された部分へと切り詰めるのであり、この部分によってわれわれは他のすべての部分へ働きかけるのである」（M411）。

「それ〔われわれの現在〕は、われわれに働きかけるものであり、そしてわれわれを働かせるものである。それは運動性のものであり感覚性のものである。われわれの現在とは何よりもまずわれわれの身体の状態である」（MM270）。

ここで記述されている事態は、身体が現在に閉じ込められていることでも、われわれが現前する場所に身体があるということでもない。示されているのはむしろ逆のことである。われわれの身体（あるいは同じことだが身体意識[5]こそがわれわれにとっての現在をなし、身体のある場所にこそわれわれは現前していると言いうる。身体がわれわれを現実につなぎとめるのだとすれば、それはわれわれにとっての現実そのものを身体が規定するからである。

生物にとって、生きること、現実的であること、社会的であることは一つである。その事情は人間においても変わらない。しかし、人間に固有の社会性というものがあるならば、それは、この原初的な社会性から何かが差し引かれ、ここに何かが付け加わった結果成り立つものだ。次節以降でこのことを問題にしよう。

第 2 節　人間に固有の社会性

孤島のロビンソン=クルーソーが、次々と現れる困難に立ち向かうために必要とするのは、他人との物理的接触である以上に精神的接触 contact moral であったということ（DS9）。キップリングの本に出てくる森林監督官が、密林のただなかに一人で住んでいても、夕食時には礼服を着用していたということ（DS9）。犯罪者が避けようとしているのは刑罰ではなく、罪の認識であるということ（DS10-11）。『道徳と宗教の二源泉』冒頭において、ベルクソンはこれらの例を畳み掛けるように挙げることによって何を示そうとしたのだろうか。

2-1 「社会的自我」と「個人的自我」

一見して分かるように、ここで問題になっているのは、実際に人々に囲まれて、人々とともに暮らすということではない。あるいは少なくともそれに尽きるものではない。これらの例によって示唆されるのは、人間は自らを、自らとは異なるものに取り囲まれ、それらとの間に関係を築きつつあるものとしてしか思い浮かべることができないということである。ベルクソンが「社会的自我」の名で呼ぶのは、まさにこのような形で表象された自我にほかならない。

ロビンソン=クルーソーやキップリングの森林監督官はその社会のうちにある自分、他人との対話を続ける自分を表象することによって社会との精神的な接触を保ち、物理的には孤独な生活を耐え忍んでいるのだし、犯罪者は自らの罪の認識によってこそ、つまり自らがもはや他人から敬意をもって接せられる人間ではないという自己表象によってこそ、社会から隔離されるのである。

「社会的自我」は自らを監視する良心 conscience（DS10）でありつつ、支え appui（DS8）でもある。この「社会的自我」の監視と支えがなけれ

ば、「個人的自我 moi individuel」も立ち行かなくなってしまう。この意味において、人間は根本的に社会的である。

> 「…われわれのうち誰も、それ〔社会〕から絶対的な意味で孤立することはできないだろう。またそれを望みもしないだろう。というのも、自らの力の大部分は社会に由来しているということ、また、エネルギーの絶えざる緊張や、努力の方向の一定性－それによって彼の活動には最高の成果が保証されるーを、絶え間なく新たになる社会の要求に負っていることを分かっているからである」（DS8）。

人間は社会のうちに位置づけられる、あるいは自らを位置づけることによって、まず何より自らと関係を持つ。人間と他の動物における社会性の違いは、この表象の有無にほかならない[6]。さて、位置づけがうまくいかない場合、彼の人格は「堅固さsolidité」を失うだろう。したがって、「社会的自我」によって目指されているのは二重の「平衡」（DS7）である。つまり、人間は生きるために周囲との間に適切な関係を築くのでなければならないし、そのことによって自らの支えを保っていくのでなければならない。

2-2　人間の社会性と生命進化

『二源泉』という書物の課題は、あるいは少なくともその重要なもののひとつは、上で見た人間に固有の社会性を、生命進化の理論に組み込むことである。つまり、人間が関係によって生きること、社会を形成する傾向があるということを、自然の要請、生命そのものの要請として理解することである。ここで、ベルクソンの生命進化の理論について詳述する余裕はないが、要点だけでも簡単に確認しておこう。

ベルクソンは『創造的進化』において、進化の二つの主要な線を描き

出した。それが知性と本能である。両者は物質を利用する二つの仕方であり、認識の二つのあり方である。知性が物事を関係として、外部からとらえ、表象するのに対し、本能は内部から共感する[7]。ここではさしあたり二つのことに注意しておきたい。第一に、知性と本能はそれぞれの仕方でともに成功を収めた認識のあり方であって、どちらかがより高度であるわけではない[8]。第二に、知性と本能は決して出来上がってしまったものではない。両者は共通の起源である生命から分岐しつつあるものだが、人間においても他の動物においても完全に分岐しきってはいない。知性と本能はそれぞれ人間と他の動物において優勢をしめる傾向に過ぎないのであって、実際には本能を伴わない知性も、知性と無縁の本能も存在しない。つまり、知性と本能は相補的なものである[9]。

さて、こうした生命進化の理論と人間の社会性はどのように結びつくのだろうか。宗教が導入されるのはまさにこの文脈においてである。『二源泉』第二章の冒頭で、宗教は知性の相関者として、そして知性が引き起こすスキャンダルそのものとして現れる。

> 「かつて宗教が示し、またいくつかの宗教がいまだに示している有様は、人間知性にとってまさしく恥辱的なものである。なんという異常 aberration の連続だろうか。経験が「それは誤っている」と、また推論が「それは不合理だ」といくら言ってみても、人類は不合理と誤りにしがみつくばかりである。人類がここでとどまっていればまだよかった。しかし、宗教が非道徳的なことを命じ、犯罪を強制することさえ見受けられるのだ。（…）人間を知性的存在と定義することから出発するとき、これは驚くべきことである」（DS105）。

動物は宗教をもたず、知性を持った人間だけが迷信に惑わされる（DS105-6）。つまり人間を合理的にするはずの知性が、逆に人間を不合理なふるまいへ導いている。宗教のない社会は存在せず、宗教は人間にと

って科学や芸術や哲学よりも根源的なものであるのならば（DS105）、人間の不合理性もまた根源的なものとなるだろう。ここでベルクソンがいったん驚いてみせるのは、こうした事態に対してである。

しかし、ベルクソンの立場からすれば、知性がもたらす「不合理」性などは偽問題でしかありえない。彼にとって知性とは生命進化の一つの傾向であり、生きるための一つの努力であるということを忘れないでおこう。知性のふるまいは、それが生きるために果たす役割という観点から評価されるべきであるし、宗教が人間社会にとって根源的であるならば、宗教が社会を維持、発展させるためにどのような貢献をしているかを探らなければならない。

2-3　宗教の役割

ベルクソンは、宗教的表象を生み出す働きのことを「仮構機能fonction fabulatrice」と呼ぶ。仮構機能は芸術を産み出すこともできるが、その本質的な働きはあくまでも宗教的表象を形成すること、そしてその表象を通じて社会を維持していくことである[10]。宗教の本質と役割をどのように理解するかは、この仮構機能をどのように位置づけるかにかかっている。彼の見るところ、心理学は適切な分類をしなかったため、この位置づけに失敗した。なるほどたしかに、宗教的表象は幻覚的なものであり、不合理なものであろう。しかし、それらを生み出す働きを「知覚でも、記憶力でも、精神の論理的作業でもない」（DS111）という「消極的な」理由で想像力一般に還元してはならない。というのも、仮構機能が作り出す表象は、すなわち宗教を形成する表象は、ただの空想と異なり、われわれを行動へと導くからである。

> 「歴史は認識であるが、宗教は主として行動である。宗教が認識と関わるのは（…）、何らかの知的性格 intellectualité によってもたらされ

る危機を避けるのに知的表象が必要とされる限りにおいてでしかない。この表象をそれだけ切り離して考察し、表象としての資格で批判することは、表象がそれに伴う行動と一体をなすのを忘れているのだろう。一連の児戯であり、一連の不合理でさえあった彼らの宗教を、偉大な魂がいかにして受け入れることができたか、と問うときわれわれが陥るのはこの種の誤りである」（DS211-12）。

知性的性格、すなわち知性を持っているということに由来する危機を回避すること。「静的宗教」と彼が呼ぶものに関して加えられる説明は、本質的にはこの点に尽きている。宗教とは、知性によってもたらされる危機に対して自然が取る予防と対抗の手段にほかならない。

むろん、宗教は信仰と儀式が社会のなかで受け入れられることによって形を成していくのだから宗教的表象も社会によって異なった、多様な姿をとりうるだろう。しかし、そのような社会によって獲得され伝えられていった諸要素を取り除けば、人間が知性を獲得したこと自体による危機が浮かび上がってくる、というのがベルクソンの考えである。そして、この原初的な危機は、われわれの見るところ身体と関わっている。次節ではベルクソンが挙げた具体例を検討しながら危機と危機への対応策の正体を見極めてみよう。

第 3 節　「仮構機能」と身体

では、知性によってもたらされる危機とはどのようなものだろうか。すべては知性が反省を可能にするということにかかわる。ベルクソンは本能に支配された動物と対比する形で三つの例を挙げている。

3-1　危機の種類

動物の意識が本能によって「外部」へ、つまり「なすべき」（DS126）仕事へ集中しているのに対して、人間は反省によって自分自身に目を向けることができる。ひとたびこうした視点の転換がなされてしまうと、仕事は「束縛」「犠牲」（DS126）として現れるだろう。それはもはや動物においてそうであるように自動的になされるものではなく、抵抗を乗り越えてなされるものになるだろう。反省することによって人間は「快適に生きることしか考えなくなる」（DS126）。つまり、エゴイスムへ導かれる。そのままに放置された場合、反省は社会を解体に導くだろう。これが第一の危機である[11]。

第二の点は死の観念に関わる。動物は死を演じる（死んだふりをする）ことはあっても、死を思考することはない。仮に死というものを理解しても、それが一般観念に高まることはない。自然は動物に自らの死に関する表象を与えなかった。動物の生は「現在の、未来への絶え間ない侵食」（DS136）である。来るべき死が現在の行動に影響を与えることはない。それに対して、人間において反省は死の不可避性という観念をもたらす。動物のように何の不安もなく「生にしがみつく」（DS135）ことはもはや不可能である。こうした死の確信はそのままに放置された場合、人間を「意気消沈させるdéprimante」（DS136）ようなものであるだろう[12]。

第三の点はより一般的な事態に関わる。上で見たことから明らかなように、動物の場合、認識と行動は直結している。「それ〔動物〕において、目的と行動との間にさしはさまれるものは何もない」（DS144-5）。これに対して、人間が思い描くものと実際になしうるものとの間には大きな落差がある。反省によって、自己の周囲を大きく越えた認識が得られるとしても、行動能力も同じように広がっていくわけではないからだ。この認識能力と行動能力の乖離に由来する、「偶発事 accident へと開かれた…

隙間」(DS145)は、そのままに放置された場合、やはり行動への意欲をそぐことになるだろう。

3-2　危機の特徴

ベルクソンが例として挙げる危機は以上の三つである。第一のものは直接的に、第二、第三のものは個人の生を脅かすことで間接的に、社会の存立を危ういものにする。これらの危機はどのような形で身体と関わっているのだろうか。第一節での考察をもとに捉え直してみよう。

三つの危機に共通しているのは、行動が阻害されているという点である。意欲の減退を強いるという形で現れる第二、第三の危機についてこのことは見やすいだろう。また第一の危機に関しても事情は変わらない。ベルクソンにおいて、行動とは身体と環境との間に適切な関係を築くことだった。したがって、意識は身体の外に、関係そのものに向かっていなければならない。しかるに、エゴイスムとはそうした視線を放棄し、自らにのみ目を向け続ける態度である。したがって、これもまた行動の危機であると考えてよい。

生物の身体が行動のためにあり、行動を通じて現実へ参入するためにあるものならば、行動の危機とはまさに身体そのものの危機にほかならない。これはもちろん、物理的に身体を損なうようなものではなく、身体と環境との「平衡」を乱してしまうのである。

われわれは知性がもたらす危機の性質について、身体の役割をふまえて次のようにまとめることができるだろう。反省によって人間は意識を自分自身へと向ける。そのとき、身体はもはや環境との関係によってではなく、それ自体として自らの身体ととらえられ、表象される。このように孤立した形で表象された身体において際立つのは、その壊れやすさと無力さである。身体は常に周囲からの圧力にさらされ、それに対してごくわずかな、しかも不確かな影響しか周囲に与えることができず、い

ずれは滅び行くものとしてとしてしか表象されえない。少なくとも「純粋知性」（DS216）がもたらす反省をそのままに放置した場合はそうである。こうした表象がもたらすのは不安であり、行動への意欲の喪失である。つまり現実的状況へ身を投じることへのためらいや恐れであり、「生への没頭attachement à la vieに生じる一時的なゆるみ」（DS222）である[13]。前節で述べたように、生物一般にとって生きることと現実であることと社会的であることが不可分ならば、ここで明らかになるのは、表象を持った人間だけがそうした生のあり方から、全面的にではないにせよ離れうるし、離れてしまう危険性があるということだ。

3-3　危機への対応

知性の産み出すこのような表象が生の円滑な進行を妨げるのならば、知性は純粋な形で働くのであってはならない。知性を中和し、「平衡を回復させる」（DS135, 144）手段がなければならない。その手段こそが「仮構機能」である。「仮構機能」に関するベルクソンの説明は概略以下のようなものだ。

知性は「本能によって、あるいはむしろ本能と知性との共通の起源である生命によって監視され」（DS167）ている。とはいっても人間は知性の方向へ進化した生物なので、本能そのものが知性への対抗手段となることはできない。具体的にいえば、知性が行動を妨げるとき、本能が直接、有無を言わさない形で人間を行動へ導くことはできない。したがって、本能は「知性そのものを介して」（DS124）知性の働きを中和するしかない。つまり、知性のもたらす表象に対抗する表象を、知性そのものを手段として産み出すしかない。このことから明らかなように、「仮構機能」は知性と本能どちらか一方の能力ではない。それはむしろ両者の協力によって説明される（DS171）。知性と本能という、分岐しつつある傾向が協力できるのは、両者の起源である生命が人間を行動へと向かわせ

ることを要求するからである。したがって、仮構機能は「人間という種の生存条件」（DS207）そのものから生じる[14]。

では、「仮構機能」によって産み出される表象はどのようなものだろうか。行動の危機に対抗するものである以上、それは人間を行動へ導くものでなければならない。つまり、単なる観念ではなく「観念 - 運動的idéo-motrice」（DS223）なものでなければならない[15]。かくして、エゴイスムに対しては「妨害し、禁止する神」（DS129）が、死の不可避性という観念に対しては「死後の存続というイメージ」（DS136）が対置され[16]、行動と結果との隔たりには、その間を埋める「好意的な諸力puissances favorables」（DS146）が持ち出される。ここでも、検討しておきたいのは、こうした表象と身体との関係である。

ベルクソンによれば、今日の科学にとって、身体とは「本質的には、それが触覚に対してそうであるところのもの」（DS138）に他ならない。すなわち、われわれが身体の実在を確かめるのは、形と大きさを持ち、一定の場所を占めるものとしてである。しかし「直接的印象」（DS139）にとって事態は異なる。「未開人」[17]は視覚によってとらえられる身体、つまり科学の見地からは単なる現象でしかない「見られる身体」に、「触れられる身体」と同じ実在性を付与する。前者は後者の「表皮pellicule superficielle」（DS139）であり、後者から複製され、離脱した姿を表象することができる（水面に映る場合など）。もしどちらかが生き延びるとするならば、それは間違いなく「見られる身体」のほうである。したがって「人間が影や幻影の状態で生き延びるという観念は全く自然である」（DS139）。絶えず現前し、やがては滅び行く身体を逃れ去り、生き延びるもう一つの身体[18]。ここから不死の霊魂という観念まではあと一歩である。

認識能力と行動能力の隔たりを埋める表象は、われわれの意志と一体になった形で、ごく日常的な経験のうちに現れる。たとえば、ルーレット上で自分の選んだ番号の近くで球が止まりそうになり、思わず手が動

いてしまう場合。

> 「それはあなたの外部へ投射されたあなたの自身の意志なのであり、ここで自らの決定と、期待される結果との間の隔たりを埋めるのでなければならない。この意志はこうした偶発事を追い払う」（DS147）。

やがて、習慣により手は動かなくなり、勝とうとする意志は内面化して「運 veine」（DS147）という表象へ変形する。こうして、物理的な因果関係に重ねあわされる別の「説明体系」（DS148, 149）が生じる。

注目したいのは、こうした「力学外」（DS146, 148）的な力に頼って意志を実現しようとする態度のことを、ベルクソンが「身体の論理logique du corps」（DS175）と呼んでいることである[19]。つまり、ここで身体は自らが物理的に占める範囲を越えて、周囲にあるものを従わせる、あるいは協力させる形で活動を広げていくものととらえられている。

知性はいやおうなく、身体を定まった場所と時間のうちにあるものとして示す。そして、そのこと自体によって、生命と行動の有限性という観念をも与える。その結果もたらされるのは、あまりにも壊れやすく、無力な身体の表象であり、その身体を中心とした世界の不安定な見取り図である。

知性によってもたらされる危機の正体が、この不安定さに由来する身体と環境との「平衡」の乱れであるならば、危機に対応するための表象は以下のようなものでなければならないだろう。つまり、身体そのものとは区別されつつ身体の周囲にあり、身体と適切な仕方で関わり、身体のために働くものである。ここで求められているのは身体に物理的な影響力を持つと同時に、身体を配慮する「なかば物理的でなかば精神的な semi-physique et semi-morale」（DS178）な表象であり、「効果ある現前」（DS185）である。

このような表象は事後的に生じるのではない[20]。つまり、危機に瀕した身体の表象に後から付け加わるのではない。知性は生命の監視を受けているのだから、知性の生み出す危機的な表象には、必ず危機を中和する表象が伴っているはずである。両者は重なり合ってさえいるだろう。したがって、「仮構機能」の源泉を探るならば、危機と危機への対応が同時に現れる「根本的経験」（DS185）へと立ち返らなければならない。

> 「今、反省が生じてきたとしてみよう。人間は自らを広大な宇宙の一点であるかのように知覚し、思考するだろう。もし、生きるための努力が彼の知性のうちへ、まさにこの知覚とこの思考が位置を占めているであろう場所へ、すぐさま〔それとは〕対立するイメージを、〔つまり〕事物や出来事が人間のほうを向いているというイメージを投げかけなければ、彼は道を失ってしまったと感じるだろう。好意的なものであれ、悪意を持ったものであれ、周囲の意図はどこへでも彼についてくる。それはあたかも、彼が走るとき月が一緒に走っているように見えるのと同じである。意図が善良なものなら、彼はそれに頼るだろう。意図が彼に害をなそうとしているなら、彼はその効果をかわそうとするだろう。いずれにせよ、彼は考慮に入れられていることになる。そこにはいかなる理論もなければ、自由裁量 arbitraire の余地も全くない。確信が押し付けられるのは、その確信に哲学的なものが何もなく、生命の秩序に属しているからである」（DS186）。

ここで、ベルクソンが「周囲の意図」と呼ぶ表象と身体の表象とは、組み合わされ相互に支えあっているということに注意しよう。一方において、すでに見たように身体の営みは、自らに差し向けられるものなしには立ち行かない。反省によってとらえられた身体はあまりにも無力で脆弱なので、身体に配慮しながら力を与える、あるいは行動を促すもの

の表象が必要である。ここで「意図」と呼ばれているのはそのような表象にほかならない。他方「意図」のほうも、それが身体に配慮するもの、身体に差し向けられたものの表象である以上、身体の表象なしには存在し得ない。両者はいずれも単独では成り立たないのである。従って、人間が反省を自らに向けたときまず表象されるのは、身体とそれを取り囲むものの関係にほかならない。すなわち、身体を中心としつつ、身体の外部にあるものが、身体と関わっている、という表象である。

ここまで、仮構機能によって身体の表象がどのように位置づけられるかを見てきた。結論として以下のように言いうるだろう。「純粋知性」が身体を孤立したものとして、従って無力なものとして表象しようとするのに対して、仮構機能は身体をあらかじめ周囲のものとの関係に組み込んだ形で表象し、そのことによって人間を行動へと促し、生きることへの意欲を高めるという役割を果たす。

結論

これまでの議論をまとめつつ結論を述べよう。ベルクソンの身体論に従えば、生物の身体は、環境との間に平衡を保つという、いわば原初的な社会性を持つ。それは人間も例外ではない。しかし、他の動物においてはこの平衡が本能によって保たれているのに対し、人間においては知性が平衡を乱してしまう。そこで、人間においては平衡を回復し、行動へ向かわせる表象が生まれる。知性がもたらす危機も、危機を回避させる表象も、少なくともその原初的な形ではすべて身体に関わるものである。

この「不安定な平衡」が可能であるのは、単独でとらえられた場合、無力で壊れやすいものでしかない身体の表象が、常にそれを補う表象、つまり世界が身体のほうを向いているという表象とともにあるからである。

仮構機能のこうした働きはさまざまな面から社会の形成と維持に寄与するだろう。「自分のほうを向いている」表象は、一方において人間がいわば剥き出しのまま世界のうちに放り出されるのを防ぎ、行動を容易にするだろう。他方において、それは人間に対して応答を要求する規範としても働く。世界はただ身体の周囲にあるのではなく、身体による行動を求めるものとしてあるのだし、そのようなものとしてしかありえない。逆に言えば、身体はただそこにあるのではなく、絶えず周囲からの求めに応じ、周囲と適切な関係を保つよう求められるものとしてしかありえない。

従って、ベルクソンにおいて生物学的な身体と社会的な身体を区別することはできない。人間は生物としていること自体によってすでに社会的な営みに巻き込まれているからである。

（にしやま・てるお　慶應義塾大学文学部非常勤講師）

＊　ベルクソンの著作からの引用は、以下の略号の後に頁数を付した（*Mélanges* 以外は Quadrige 版）。

DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889
MM: *Matière et mémoire*, 1996
EC: *L'évolution créatrice*, 1907
ES: *L'énergie spirituelle*, 1919
DS: *Les Deux Sources de la morale et de la religion*, 1932
M: *Mélanges*, 1972

邦訳は『物質と記憶』（合田正人・松本力訳、ちくま学芸文庫、2007 年）
『道徳と宗教の二源泉』（平山高次訳、岩波文庫、1988 年）
『世界の名著 53　ベルクソン』（澤瀉久敬責任編集、1969 年）
を適宜参照した。

1　以下、本稿で「社会」という場合、ベルクソンが「閉じた社会」と呼ぶもの、つまり自然によって少なくともその方向性が示されており、メンバーが相互に支えあいながら外的から自らを守る社会のことを指す。

2 「人間は常に二つの本質的特徴を示す。知性と社会性 sociabilité である」（DS120-121）。
「それ〔自然〕が人間に、社会において生きることを課したのである…」（DS283）。

3 したがって、物質中の諸事物は作用の「通路」（MM33）にすぎないとも言われる。

4 「空間のうちに広がっている私の身体は、諸々の感覚を感じると同時に諸々の運動を行う。諸感覚と諸運動はこの延長の定まった諸点に位置づけられているので、ある与えられた瞬間において諸運動と諸感覚の系は一つしかありえない」（MM153）。

5 「つまり、私の現在は、私が私の身体について持つ意識からなる、ということである」（MM153）。
「われわれの現在とは何よりもまずわれわれの身体の状態である」(MM270)。
上の二つの引用文で分かるように、ベルクソンは身体の状態と身体についての意識を区別しない。本文でも述べたように、意識は身体と別にあるのではなく、意識を伴っているもののみが身体と呼ばれる。

6 従って、行動に臨むときの動物のあり方は「夢遊状態」（DS95）といわれる。

7 EC176-7

8 EC136

9 EC136-7, DS122

10 「小説、戯曲、神話、そして神話に先立つすべてのものがこの機能に属する。しかし、小説家や劇作家が常にいるのではないのに対して、人類が宗教なしに済ませたことなどない。従って、あらゆる種類の詩歌や幻想は、人間精神が架空の話 fables を創ることができるのを利用した余剰として現れるのに対して、宗教は仮構機能の存在理由であるというのが本当のところだと思われる」（DS112）。
仮構機能の働き方に関しては 3-3 で詳述する。

11 これは反省が与えられるとすぐさま生じると考えられる傾向なので、「他人の幸福を促進すれば自分の利益になる」（DS126）といった高度な推論が働く場面とは区別される。次注も参照。

12 ここでも、問題となっているのは反省が与えられたまさにそのときに生じる表象である。「それは後になれば、人間種をそれ自身を越えて高め、より多くの活動力を与える哲学のうちに場所を占めうるだろう」（DS136）。しかし、最初の段階では行動の意欲を奪い取るのみである。

13 「生への没頭」に関しては、Lapoujade (2008) を参照。

14　前提として、ベルクソンにおいて自然が「功利的 utilitaire」であることを忘れてはならない。生命のあらゆる働きは生きることへと向けられており、仮構機能も、まさにそのために働くのである。なお、自然の功利性について、ベルクソンは初期から言及している。DI25 参照。

15　「観念－運動的」という表現は『物質と記憶』にも見出される。

16　ベルクソンも認めるように、これはかなり単純化された話である。個人の危機に対して突如このような完成された表象が姿を現すのではない。「…現実は、本質的なものの強化と余分なものの削除によってでなければ、悲劇 drame のように鮮やかな形へと進展しない」（DS127）。こうした進展は習慣を通じて、また社会のうちで共有され洗練されることによってなされるだろう。本稿は「根本的経験」のほうを重視したので、仮構機能の社会のうちでの停滞、変形、進展について述べることはできなかった。

17　ベルクソンが「未開人」について頻繁に言及するのは、彼らと「現代の文明人」との差異を強調するためではない。そうではなくて、習慣や訓練によって覆われた部分を剥ぎ取っていけば、後者のうちに前者と同じような表象や思考方法が見出されることを示すためである。この点に関しても本稿では触れることができなかった。Stibon-Peillon (2002) および Keck (2002) を参照。

18　Goddard は、この表象をドゥルーズの「純粋に光学的なイマージュ image purement optique」と関連づけて論じる。Deleuze (1985) p.64 および Goddard (2008) pp.111-2 を参照。

19　正確には「身体の論理」は呪術に関して使われている言葉である。それは「欲望の延長」（DS175）であり、物質が「人間のほうへ向き直り、彼から任務を受けたり彼の命令を遂行したりする」（DS174）という表象を頼りに、「自らの行動を、物理法則が許容するより先までひきのばす」（DS174）試みである。その意味で、ベルクソンがあげるルーレットの例はまさしく呪術的なものであろう。呪術は人為的なものではなく「人間に生得的であり、心を満たす欲望が外へ出たものにすぎない」（DS176）。

20　「ここで、作用やその継続の表象を抽象的な観念、つまり知的努力によって事物から抽出された観念と取るならば、それは間違っているだろう。それ〔表象〕は感覚の直接与件である」（DS189）。

参考文献

Deleuze, G. (1985). *L'image-temps*, les editions de minuit, 1985.

Goddard, J-C. (2008). “Fonction fabulatrice et faculté visionnaire. Le spectre de l'élan

vital dans Les Deux Source” in Warterlot (dir.), *Bergson et la religion*, PUF, 2008, pp.95-118.

Keck, F. (2002). “Bergson et l’anthropologie. le problème de l’humanité, dans *Les Deux Sources de la morale et de la religion*” in Worms, F. (éd.), *Annales bergsonienne 1*, PUF, 2002, pp.195-214.

Lapoujade, D. (2008). “Un concept méconnu de Bergson: L’attachement à la vie. Pour une lecture des *Deux sources de la morale et de la religion*” in Fagot-Largeault, A., Worms, F., François, A., Guillin, V. (éds.), *Annales bergsonienne* Ⅳ, PUF, 2008, pp.673-693.

Stibon-Peillon, B. (2002). “Bergson et le primitif: entre métaphysique et sociologie” in Worms, F. (éd.), *Annales bergsonienne* Ⅰ, PUF, 2002, pp.171-194.